

人文フォーラム

40

2014.3



CONTENTS

巻頭言

研究テーマとは 人文学部長 郡司 淳……1

別れのあいさつ

「メッチャ、ヤバかった」札幌での4年間 上杉 忍……2

「新人文主義」を大学の理念に 濱 忠雄……3

北海学園大学人文学会創立記念シンポジウム

「人文学の新しい可能性」

ー「新人文主義」を研究と学びの場で鍛えるー 濱 忠雄……4

在外研修報告

李修生先生のお話 大谷 通順……6

ゼミ室紹介

1部 英米文化学科 3年 米坂ゼミナール……8

国際交流レポート

2013年度カナダ・ブロック大学研修旅行報告
ゼフ ブリックリン……10

2013年度カナダ・ブロック大学研修旅行体験記
日吉杏奈、會木秀一朗、木村安里、榎彩香……12

卒業生通信

ドラッグストアに勤務して 菊地 智美……16

大学院の窓

日々、成長 竹田 麗華……17

研究、その足跡

……18

編集後記

……裏表紙

北海学園大学人文学部

研究テーマとは

人文学部長 郡司 淳



人文学部では、来年度の新カリキュラム導入にあたり、これまで大学4年間における学修の集大成として位置づけてきた卒業研究に対する学生の取り組みをさらに強化するとともに、下級生が上級生の学修体験を継承する一機会とすべく、「第1回卒業研究コンテスト」を企画いたしました。幸い25名もの学生の応募があり、2月6日の表彰式と発表会を盛会のうちに終了することができました。

当日、とりわけ印象に残ったのは、最優秀賞に輝いた佐野亜里沙さんの「このテーマに出会い、面白くてどんだんのめり込んでいった」という言葉です。この言葉からは、論文のテーマとなった「バイユー・タペストリー」という、11世紀のイングランド征服の物語を描いた刺繍画を知った際の佐野さんの新鮮な驚きや素朴な疑問といったものが彷彿とされ、どうしても真相を究めたいとの切実な思いが伝わってきたからです。

どのようなテーマを選ぶにせよ、研究としてやる以上、それは他者と共有しうる意義あるものであるべきです。そのためには、現在にいたるまで長きにわたり蓄積されてきた研究の歴史を尋ね、そこに存在するさまざまな学説に学ぶ必要があります。しかしながら、学生の皆さんには、そうした先人・先達の知的遺産に臆することなく、原初の出会いに感じられた新鮮な驚きや素朴な疑問を大切にしたいと念じています。若い世代の直感に導かれた素朴な問いは、往々にして従来見過ごされてきた物事の本質に連なるもので、研究を新たな次元に押し上げていく力となるからです。

ところで、研究テーマに関連して思い出されたのは、ヨーロッパ中世史家である阿部謹也の『自分のなかに歴史をよむ』（筑摩書房、1988年）が紹介している恩師・上原専禄との対話です。卒業論文のテーマについて悩んでいた阿部は、ある日、ゼミの指導教員である上原を自宅に訪ね、相談したところ、「どんな問題をやるにせよ、それをやらなければ生きてはゆけないというテーマを探すのですね」と言われたといいます。また上原は、学生が発表した際には「それでいったい何が解ったことになるのですか」と問うのが常であったともいいます。「解るということはそれによって自分が変わるということでしょう」、と。

阿部は、この上原の言葉を胸に、自分が生きていくことと研究の接点を生涯問い続けます。その過程で「解る」ということについて「ひとつの答えが出たのは、もう三十歳も後半のことだった」と書いています。阿部は、そのような自らの研究の歩みを振り返ったこの本のなかで、学問の意味を「生きることが自覚的に行う、つまり自覚的に生きようとする」と解釈し、そのためには「自分の内奥を掘り起こしながら、同時にそれを『大いなる時間』の中に位置づけてゆく」というふたつの手続きが必要であると説いています。

昨今、生涯学び続けることの大切さが、煎じ詰めていえば、現代という予測不能な時代にあって今日学んだことが明日には役に立たなくなる、といった意味で強調されています。しかし私は、生涯学び続けるとは、とりわけ人文学の場合、自己の研究テーマを「〇〇をとおして何を明らかにしようとするのか」を常に自問自答することで発展させるとともに、上原や阿部の言葉のような意味で真に自分のものとしていくことだと理解しています。そのためにも若い世代には、折に触れて研究の初心に立ち帰り、自分がなぜこのテーマに惹かれたのかをそれまでの人生の歩みと関連づけて考えてほしいと思っています。

学生の皆さんが、この人文学部で、そのような生涯を賭けて探究するに足る研究テーマと出会うことを祈念してやみません。

「メッチャ、ヤバかった」 札幌での4年間

英米文化学科 教授 上杉 忍



ある日、ゼミが終わった後、私が書類をチェックしていると学生たちのおしゃべりが耳に入ってきた。「チョー、ヤバイ、メッチャ、メッチャ、ハンパナイ」という単語の連続。若者たちの言語の変化には柔軟に対応しなければならないと思うのだが、その「劣化」には心を痛めねばならない。言語の劣化は、思考の劣化、文化の衰退への道だからだ。本を読む忍耐力を育てることができなかった若者たちは、これからどこで何をどう学ぶのだろうか。

札幌に来て4年。若者たちをめぐる困難な状況はさらに深まっているように感じる。仲間関係が揺らいでいる。不安との戦いは青春期につきものだが、彼らの不安感は並大抵ではない。不安で一杯な学生たちにつき合ってもらうのは容易ではなかったが、私も迷い迷いしながら、それなりに頑張ったつもりだ。

4年間、楽しいこともたくさんあった。スキーはすいぶん上達した。技術とスピードのある北海学園職員の早朝フットサルの仲間に入れてもらって、大事にしてもらった。雄大な北海道の大自然も満喫した。おいしい物もたくさん食べた。もちろん学生たちの笑顔にも励まされた。

少しは私も北海道の困難がわかるようになった。北海道は「開発」のフロンティアだったが、同時にその犠牲者でもある。JRの不祥事にも、TPP問題にも、それが見えてくる。しかし、私は、北海道に来てアイヌ文化の担い手たちの意気軒昂な姿に接する機会を得て励まされもした。彼らこそ近代化の真の「犠牲者」なのに。

2011年3月11日、「大震災」。札幌の地でもその揺れは怖かった。被害者の多くはテレビで映し出されるその映像を見ることもなく逝ってしまった。テレビに毎日登場し「想定外」を繰り返した原子力村出身の大学教授たちは、まだ「安全だ」と言うのだろうか。どちらにせよ泊原発が動かなくても北海道は動いている。

2013年12月6日も覚えておかなければならない日だ。この日「特定秘密保護法」が圧倒的多数で採決された。最近、宮沢・レーン事件について知った。北大生、宮沢弘幸がアメリカ人教師レーンに旅先で根室の海軍飛行場を見たことを何気なく話したことから事件は始まった。彼は「軍事機密を敵国人に漏らした」として1941年12月8日に逮捕され、拷問、15年の刑を宣告された。終戦直後釈放されたが、まもなく27歳の若さで亡くなった。もう、宮沢さんのような犠牲者を出してはならないと思う。

札幌での最初の年に私は、生まれて初めて手術入院を経験した。その時、病床で『アメリカ黒人の歴史——奴隷貿易からオバマ大統領まで』（中公新書、2013年）の執筆を決意し、ようやく3年目の終わりに出版できた。各方面からの予想外の反響に気分を良くしながら、定年退職を迎えることができそうである。それもみな仲間の皆さんの温かい励まし、学生たちの瞳があってこそその結果だった。感謝、感謝である。

「新人文主義」を大学の理念に

英米文化学科 教授 濱 忠雄



2003年4月から11年間になる北海学園大学での教員生活を大過なく終わることができました。一緒に学んだ学生・大学院生の皆さん、同僚教員、事務職員の皆さん、研究と教育を支えてくださったすべての皆さんに、心から感謝申し上げます。

恥ずかしいことに、人文学部の理念が「新しい人文学」「新人文主義」であることを着任後に初めて知りました。そして、その意味が、近代ヨーロッパに起源を持つ人文主義を継承しつつ、その人文主義が堕ちこんだ隘路から脱して、他者や自然と共生しながら、人間としてのあるべき生き方を追求しようとする視座であることを知るに及んで、これに深く共鳴しました。

私の研究課題は、「知られざる国」ハイチの歴史の細部にまで分け入り、カリブの小国ハイチというローカルな場から出発して、人文主義や啓蒙思想、「人権宣言」などのヨーロッパ的な「知」の意味を吟味し、世界的横断による分析とともに、脱植民地化や普遍的自由の実現といった長期的なパースペクティブでの検討などをとおして、より等身大に近い近代世界史を構想することにあります。その研究が「新人文主義」に繋がったからです。

人文（科）学は、社会科学や自然科学とならぶ学問の一分野のことを言い、人間と人為の所産たる文化を研究対象とします。それに対して、研究の視座である人文主義は、人文（科）学に

限らず社会科学、自然科学を含むすべての学問分野に関わります。とりわけ、他者や自然と共生しながら、人間としてのあるべき生き方を追求する「新人文主義」は、そうです。それゆえ、「新人文主義」は北海学園大学の全体、全学部の理念であるべき、と考えます。

北海学園大学の建学の精神は“徒に官に依拠せず自らの努力をもて立つ”という自主独立の「開拓者精神」とであるとされています。先人の思いは、それとして理解したうえでのことですが、「開拓」「開発」の言葉からは、アメリカ史における「フロンティア」や北海道史のなかの「開拓」や「開発」に潜む陰の部分が、また、「グローバル化」の進行に付随する「低開発の進展 development of under-development」の問題が、さらには、ハイチ史研究のなかで浮き上がってくる、フランス人が植民地支配を正当視する際に持ち出す「文明には非文明を文明化する使命がある」とする「文明化の使命 mission civilisatrice」や『『人権の国フランス』の文化による人類の教化は普遍的な任務である」とする「フランス・イデオロギー l'idéologie française」あるいは「植民地共和国 république coloniale」の言説などが想起されるからなのです。

新しい時代の大学の理念としては、「新人文主義」の方が相応しいのではないかと愚考していますが、どうでしょうか。

北海学園大学人文学会創立記念シンポジウム

「人文学の新しい可能性」 —「新人文主義」を研究と学びの場で鍛える—

英米文化学科 教授 濱 忠雄

2013年11月16日、前身である北海道人文学会を改組した北海学園大学人文学会が創立されました。これは、2001年に創設された北海道人文学会に託した先人の思いを継承しつつ、身の丈に合った新たな発展を期すものです。

北海学園大学人文学会は「『新しい人文学』の創成」を目的に、人文学部の教員・元教員、卒業生、大学院生、学生などが会員となります。創立総会では、「会則」を承認するとともに、会長に郡司淳氏、委員に田中綾氏、船岡誠氏、川上武志氏、本城誠二氏を選出しました。

この新たな出発を記念して、「人文学の新しい可能性」をテーマにシンポジウムが催されました。

「新しい人文学」あるいは「新人文主義」は、北海学園大学人文学部が1993年の開設当初から掲げてきた理念です。それは、近代ヨーロッパ

に起源を持つ人文主義を継承しつつ、同時に、その人文主義が堕ちこんだ隘路から脱して、他者や自然と共生しながら、人間のあるべき生き方を追求しようとする知の営みです。

人文学部は2013年で開設20周年を迎えましたが、これを記念して5月18日には「人文学の新しい可能性」のテーマで学部が主催するシンポジウムが開催されました。東北大学の佐藤弘夫教授、京都大学の芦名定道教授のお二人と人文学部のテレングト・アイトル教授による刺激的な発題に基づく討論をとおして、「新しい人文学」あるいは「新人文主義」の立場が現在において少しも色あせていないとの確信を得ました。

そこで、今回のシンポジウムは、5月のシンポジウムと同じテーマで、人文学部の教員の皆さんに日頃の研究や学びの場で考えておられることから発題していただき、「新しい人文学」の理念をさらに鍛えることを目的に企画しました。このような発案・企画をしたのは、「新しい人文学」や「新人文主義」という言葉をいわば念仏のように唱えていても意味がない、個別・具体的な研究や教育の場で深められなければならない、と考えたからです。

人文学部は、日本文化学科、英米文化学科とともに、「言語（言語・文学）文化」「思想文化」「歴史文化」「環境文化」の専門分野からなります



ので、各分野からお一人ずつに発題していただきました。4名のパネリストと表題は次のとおりです。

- ・本城誠二氏（英米文化学科教授＝アメリカ文学・文化）「周縁からの視線－人文学／文学／文化をめぐる－」
- ・大石和久氏（日本文化学科教授＝映画美学）「映像、あるいは人間を超え出る知覚について－ベンヤミン／ベルクソン／連続写真－」
- ・追塩千尋氏（日本文化学科教授＝日本古代中世仏教史）「人文学としての歴史学－日本宗教史研究を素材に－」
- ・村中亮夫氏（日本文化学科准教授＝人文地理学）「地域に学ぶ人文学」

まことに多岐にわたる発題の内容と約1時間にわたった討論の概要については、『人文論集』に掲載される予定ですので、ここでは割愛し、フロアからの質問にもあった教育課程との関係についてのみ触れます。

5月のシンポジウムの立案・司会者だった安酸敏眞氏が、シンポジウムを振り返った文章（『人文フォーラム』39号、2013年9月）の最末尾で、「問題は具体的な教育課程にどう反映させ、いかなる人材を実際に育て上げていくかです」と書いているように、学びの場での具体化が今後の課題になるでしょう。人文学部では、来年度から「人文学概論」を新設するほか、「大学とは」「人文学とは」に始まり「読む・

聞く」「考える・調べる」「書く」「伝える」などの基本的作法や「人文学を学ぶための100冊の本」を盛り込んだ手引書として『「自分」で考える人文学－基礎ゼミハンドブック』が作成されます。これらは、「新しい人文学」が学びの場で具体化する大きな一歩となるでしょう。

受付名簿に記載された参加者は計50名（現教員21名、元教員2名、卒業生7名、大学院生6名、学生14名）で、卒業生、大学院生、学生の皆さんが過半を占めました。

シンポジウムが、学生の皆さんの演習での発表や卒業研究、大学院生の皆さんが修士論文や博士論文で取り組んでいる専門研究と、「新しい人文学」や「新人文主義」という視座とが、どのような繋がりがあるのかを考えるための一つの機会となり、刺激となったとすれば、たいへん嬉しいことです。

これまで人文学部の各種委員の分掌の一つとして教授会で選出されていた人文学会委員を、今後は学会が独自に選出するなど、人文学会は名実ともに自立した学会組織になりますが、人文学部における研究と教育を下支えする研究活動とその交流、切磋琢磨の場として、その役割はいっそう重要になるでしょう。また、卒業生や大学院生、学生の皆さんによる研究発表や交流の場ともなって、ゆくゆくは、懸案である「人文学部同窓会」の結成にもつながることが期待されます。



[在外研修報告]

李修生先生のお話

日本文化学科 教授 大谷 通順

今年度4月より約半年にわたる在外研修の機会をいただいた。31年ぶりに北京師範大学のキャンパス内に居を定め、早速かつての指導教官、李修生先生をたずねた。先生はこととして御年80歳だが、まったく老いたご様子がない。連絡にはEメールを使われ、ご著書の執筆もすべてパソコンでされる。趣味の観劇によくいかれるが、チケットの予約もご自宅からネット上で済まされる。

その日はどういう流れか、北京師範大学中文系の伝統に話題が及んだ。その伝統とは――

1. 若いうちは見解を公刊させない。
2. 議論は歴史の基盤に根ざす。
3. 文献に対する読みを突きつめる。
4. 大テーマを騙らず、小テーマを羞じない。

1はひどく閉鎖的に響くかもしれないが、業績かせぎの時間の無駄から若者を救い、また老いて「自らの口を打つ」(未熟な発言を後悔する)ことを防ぐため、と聞けば一理ある。2、3、4はあたりまえではないかと一瞬思うが、昨今の自己と他者(特に中国の一部傾向)をよくよく顧みると冷や汗が出る。ふと李先生から遡り、「中国民俗学の父」鐘敬文先生、「現代中国を代表する書家」啓功先生へと、私がその警咳に接した3代の中文系主任のお仕事と、人となりとを改めて思い起こし、思わず襟を正した。

帰りしなに李先生が最近書かれた2篇の論文をくださった。1篇は、北宋の詞人柳永の職位について、多数の確かな史料を用いて通説の誤謬を正し、その結果をさらに作品解釈にまで



李修正先生(左)のご自宅にて



北京の老舗料亭「東興楼」にて。中央が李修正先生。左端は筆者の兄弟子、李真瑜氏（北京師範大学文学院教授）。題字は、いまは亡き啓功先生のもの。

及ぼしたもの。もう 1 篇は、元代初期文化の担い手である「儒戸」の戸数について、やはり確かな史料に基づいて既存の計算データの誤りを指摘し、新たな統計結果を算出して、元朝に対する彼らの数量的な影響力を考察したもの。いずれも上に述べた北京師範大学中文系の伝統が躍如とした論考である。

その後も何度か李先生に拝謁することができたが、先生は幼少のころ宣武門内の胡同（路地）内に暮らしておられたので、解放前の北京の様子をよく語ってくださる。その一例を挙げよう。

北京外城の南端にある陶然亭公園は、今でこそ記念碑的建造物に溢れたサイトとなっているが、解放前は荒れ野に寺がひとつ建つばかり。そこに若くして病死した男女の墓があった。男は初期中国共産党のリーダー、高君宇。女は北京師範大学附属中学の国語教師、石評梅。男が亡くなってここに埋葬されると、女はその墓の基石に、男がかつて彼女に贈った詩句を彫った。

「私は剣、私は火花、私は雷光の輝きのよう
うに生まれ、彗星の速さのように死にたい」

じつは 30 年前に、私は公園内にうち捨てられたその基石を見にいったことがある。そのときには気づかなかったが、先の詩に続いて、小

さな文字で女の言葉が彫られていたらしい。

「私には彗星のようなあなたの生命を引き留めることができず、残された涙を墓の辺に注ぐばかり。……私が会いに来られなくなるその時まで」

李先生によれば、その言葉どおり女は墓守りのすえに病死し、男の墓のかたわらに埋められたそうだ。

解放後、公園造成のための撤去、二人の愛への再評価、文革による否定、そして再評価と、政治情勢によって墓は 2 度壊され、2 度建てなおされた。私が見たのは文革による破壊のあとだったことになる。かつては男の墓標に向かって寄り添うように、女の小さな墓標が控えめに立っていたそうだが、ここも現在は「愛国教育基地」となり、巨大な墓碑が 2 基、いずれも南面して堂々と屹立し、ご丁寧にそばには二人の石像まであるという。先生のお話は必ず似而非掌故ものの流行や、政府による歴史の捏造に対して、批判や皮肉を表明して終わる。

先生からうかがった話はまだまだあるが、紙幅も尽きた。李先生、どうかこれからもお元気で、さまざまなお話をお聞かせください。

ゼミ紹介

1 部 英米文化学科 3 年 米坂ゼミ



ゼミ指導教員から……………

このゼミでは、応用言語学という学問の中の社会言語学、語用論、言語教育などといった様々な言語学のテーマを探究しています。ゼミの学生達はグループを作り毎週テキストの決められた範囲を読みます。そして授業前までに学生達がそれぞれの担当箇所をオンライン上に日本語の要約をアップロードして、全員で共有します。授業では英語のハンドアウトを準備し、自分の担当箇所を英語を使ってお互いに教え合います。学生達は苦勞しながらも工夫しながら仲間達と楽しく学んでいます。これはスピーキングの良い練習になるでしょう。一つの分野が終わるごとに学生達は興味を持った一つの分野についてテキストの内容を深く掘り下げ、パワーポイントを作成し、プレゼンテーションを英語で行います。その際は田中ゼミと合同でゼミを行います。(田中ゼミも同じ内容を同じ進度で行っている。)米坂ゼミの学生達はこれらの英語活動を行うことによって、言語に詳しくなると同時に、リーディング、スピーキング、プレゼンテーションの能力に自信を持つようになります。(米坂)

学生から……………

このゼミでは、応用言語学を学びます。おもに言語教育や言語習得や言語教育について学びます。そのため教職課程を履修している学生が多いのがこのゼミの特徴です。私は教職課程を履修はしていませんが自分自身の英語学習に役立てたいと考え、米坂ゼミに入りました。毎週たくさん英語を読むのもこのゼミの特徴で、かなりハードワークです。しかしたいへん英語の勉強になり、日に日に自分の英語力が上がっていくことが実感出来ます。授業も英語を使って学生が主体的に行うため、英語をもっと学びたい、英語が好きだ、という人に向いているゼミではないかと思います。またこのゼミでは英語でのディスカッションやプレゼンを行うことがあたりまえなことなので、自然と語学力と同時に社会に出てから必要なスキルも身に付いていると思います。言語学と聞くと、固いイメージや難しそうというイメージがありますが、

私たちの生活の身近なことに関連していることもあったりするので興味を持って学んでいます。(Koki Uotani)

米坂ゼミでは、応用言語学について研究しています。主な活動内容としては、テキストに基づき、サマリーの提出、ハンドアウトの作成、それについての発表内容の準備をペアワークで行います。ゼミ内では、それぞれのペアが発表を行い、その後、疑問点の確認やお互いの意見をグループディスカッションという形でシェアします。ディスカッションというと堅苦しいイメージですが、実際は和気藹藹と話し合っています。また、スザンヌ先生のアドバイスにより、応用言語学について、より深い知識を学ぶことができ、実は応用言語学は私達にとって身近なものであるという事が実感できます。(Keita Nakagawa)

このゼミはすべて英語で進められます。わたしは海外へ留学した経験が無く、英語を使う機会は大学での講義中のちょっとしたやりとりくらいだったので、実際に英語を使って自分の意見を伝えたり相手の意見を理解したりできるかとても不安でした。しかし、ゼミの友達や先生のフォローのおかげで、週を追うごとに自分が英語に慣れていくのが体感でき、少しずつ、英語でコミュニケーションが取れるのが楽しいことになっていきました。少人数でのゼミのアウトホームな雰囲気のおかげで、応用言語学という難しい内容にもかかわらず楽しい気持ちで学んでいくことができます。英語で書かれたテキストを読み進めることには骨を折りますし、最初は少し辛いなという気持ちもありましたが、今では、「せっかく英米文化学科に入ったのだからこれくらいのことはこなしてやるぞ」という気持ちが大きいです。もっと言語について知りたい、もっと言語に深くかかわりたい、という人にとっては、もってこいのゼミだと思います。(Sayo Yamada)

私たちのゼミのテーマである応用言語学は、固定された枠にはまらない様々な視点から常に変化・発展していく英語という言語を学ぶことができます。また、英語学習のための知識だけでなく、日常生活や社会において相手とのコミュニケーションを深めるための方法や、その実践のためのヒントを学ぶこともできると私は思います。一つの方針にとらわれず、より多くの選択肢を、講義を重ねるごとに発見することもこのゼミの魅力の一つです。さらにこの分野は考える力、話す力といった能力を養い、問題解決能力を高めるきっかけにもつながっていきます。演習を通じて常に新しくなっていく言語と向き合い、挑戦を続けていく学問でもあると私は考えます。ゼミではメンバーや教授と意見を交えながら内容を理解し、プレゼンテーションを通じてさらに知識を掘り下げていく、と段階を多く踏んでいかなければいけません。しかし、積極的に取り組んでいくことで新しいことに気づき、言語学習はもちろん、応用言語学以外の多種多様な分野にも活かせるようになると考えられます。(Shingo Kimura)

このゼミは言語学、主に応用言語学と第二言語習得について学びます。当初私は「言語学というのは難しいのでは」と尻込みしていましたが、言語はどのように構成されているのか、第二言語を学ぶにはどのような方法があるのかな

ど、勉強していくと興味深いことがたくさんあります。定期的に行われる田中ゼミとのジョイント発表では様々な考えを聞くことができ、知識が増えると共に見識を深めています。このゼミの3年生は先生を含め8名と割と少ないですが、みんな仲が良くゼミの時間も和気藹々としています。また総じて意欲が高く、日々お互いに切磋琢磨している素晴らしい関係だと自負しています。

(Mei Nakayama)

私が所属する米坂ゼミでは応用言語学を扱っており、同じゼミの仲間たちと協力しながら学習に励んでいます。ゼミでは全員が事前に英語の教科書を読み、各パートの内容を教えあうという形をとったあと、3週間に1回程度自分が担当したパートで興味を持った点を調べ、田中ゼミと合同でプレゼン形式での発表を英語で行います。この活動は簡単ではありませんが、一人でやるのではなくペアを作り協力して行うので、正直ゼミが始まったころは少しつらいと感じきちんとやっていたいけるか不安なこともありましたが、現在は仲間と楽しく学習できています。また米坂先生も学生をサポートしてくださるので非常に充実したゼミだと思います。この課題のおかげで英語を読むスピードや語彙力が徐々についてきたように感じます。これらの点で私は米坂ゼミに入って本当に良かったと思っています。今後も互いに協力し切磋琢磨していきたいと思っています。

(Hanako Matsubara)

英語学概論では英語学・言語学の基礎について学びますが、米坂ゼミではそれを更に深く掘り下げていきます。教科書が全て英語なので、初めてそれを手にしたときは、この内容を理解しなければならないのかと気後れしましたが、数をこなすうちに自然と英文を読み理解するのにそれほど時間がかからなくなったように感じます。また、英語でサマリーを作り、英語でレジュメを作り、英語でプレゼンをするという英語づくしなので、自分の英語力を高めることができます。中には第二言語学習についての項目で教職課程に関わる部分もあり、教職課程を受講している私にとってとても為になります。このゼミで扱う文章は、Readingで扱う文章とは違い専門性が高く難しいですが、私の目指している「英語の勉強」そのもののように感じます。

(Mari Sawaguchi)

国際交流レポート

2013 年度カナダ・ブロック大学研修旅行報告 ブロック大学プログラム

英米文化学科 講師 **ゼフ ブリックリン**



2013 年 9 月、私は人文学部の学生たちとカナダ・ブロック大学へ同行する機会をいただきました。今年退職なさる英米文化学科の上杉教授と一緒に、9 月 1 日から 22 日までの 3 週間のブロック大学プログラムへ、13 人の学生を引率しました。（今回は経済学部の学生がこのプログラムに参加する初めての年でもあり、経済学部の学生 10 人と 2 名の引率の先生も同行しました。）

第 1 日目、学生達は 3 週間ホームステイをすることになるホストファミリーと会い、英語で交流をはかりました。私はこのときホストファミリーが学生達にどのように挨拶したかを見ただけで、参加したすべての学生にとって新

しい経験であることが見てとれました。ホストファミリーにはハグをする人、キスをする人、握手をする人がいて、学生達はそれぞれ自分かどのようにホストファミリーと交流すればよいのか理解しようとしていました。応用言語学博士過程の研究テーマがこのことである私にとって、異文化がお互いにアプローチし合う状況は、完璧な実例でした。多くの学生は、会ったばかりのホストファミリーからハグされることにとまどいを感じていたようですが、私は彼らがすぐ理解して、そして研修が終わる頃にはむしろ自分からハグをするまでになるであろうと確信しました。



北海学園大学の学生は、ブロック大学プログラムにこれまで 10 年以上参加してきました。今年度が 12 年目となります。ブロック大学プログラムは 3 週間のホームステイ、英語演習の授業、滞在先での様々なアクティビティで構成されています。この研修には世界中から 500 人の学生とブロック大学の 60 人の講師が関わっています。授業は英語だけで行われます。授業はリスニング、スピーキング、リー

ディング、ライティング、文法にわけて集中的に行われます。学生達は午前 9 時から午後 4 時まで授業をうけます。このプログラムには英語を練習するたくさんの方がいます。

私たちが滞在したのはカナダの中心エリアのセントキャサリンズというところでした。トロントから南に 1 時間、ナイアガラの滝から北に 30 分という場所です。このエリアはナイアガラの滝とワインの生産地として有名です。セントキャサリンズの街は小都市の便利さを備えた小さな美しい街です。多くのレストランや店があり、すべてはバスの便のよいところにあります。学生はみなホームステイ先からセントラルバスステーションへ行くことも、そこからブロック大学やその近辺のショッピングエリアやレストランへ行くことも容易にできました。

私たちはナイアガラの滝やトロントを含めた多くの人気の観光スポットへ小旅行をし、同様にビーチでのピクニックやボーリングなどのアクティビティも行い、アイスホッケーの観戦さえもしました。アイスホッケーはカナダでは大変人気です。学生達は 100 店舗以上のお店が入り最新ファッション雑貨やユニークな土産物売っている近隣のショッピングセンターへ行く機会もありました。私たちは 100 年以上前の要塞であるフォートジョージなどの歴史的な場所も訪れました。

おそらく学生達が参加したイベントのなかで最も興味深かったのは、年に 1 度の「ぶどう踏み」でしょう。このイベントは毎年ブロック大学のメインキャンパスで行われ、ブロック大学のすべての学生が参加できます。多くの学生がグループを作り、このイベントのために面白



い衣装に身を包みます。ワイン作りでは、ぶどうを搾ってジュースを取り出す必要があります。このイベントはぶどう踏みの古き伝統を再現する象徴的なものです。チームごとにバケツが 1 杯分のぶどうが与えられ、イベントが開始すると、みんな一斉にぶどうをビニールのシートの上に広げ、踏みつぶし始めます。これはあちこち汚れる大イベントであり、ぶどう踏みをしている人だけでなく見ているひとにとっても大変楽しいイベントです。このイベントが終わるころには、参加している他の 300 人のブロック大学の学生同様に私たちの学生もグレープジュースまみれになりました。みんなはベタベタになりつつも満面の笑顔でした。

3 週間で学生達は多くのアクティビティとイベントに参加しました。学生達は世界中からの他の ESL の学生達と一緒に授業も受けました。ブラジル、イタリア、ドイツ、韓国、サウジアラビア、中国からの学生がいました。合わせて 15 カ国もの国からこのプログラムに参加していました。プログラムに参加することは、学生達に英語を使って他の国々の人と友達になる機会を与えました。このように英語を実際に使う方法は、個人の英語力を向上する効果的な方法であることが示されており、我々の学生達は実際のコミュニケーションを通じて、ボキャブラリーと文法を会得することができました。常時英語を話さなければならない環境で英語を実体験するということは、ほとんどの日本人学生にとって得難い経験であり、学生達は自分の得手不得手に気づけたと思います。

学生達はみなこのプログラムの経験がどんなに価値のあるものであるか理解でき、多くの学生がもっと勉強し、自分たちの英語力を向上させたいという気持ちを表していました。

私の価値観を変えた三週間

1 部 英米文化学科 3 年 日吉 杏奈



私にとってカナダは初めての海外ではありませんでしたが、カナダで過ごした 3 週間は毎日が刺激的で 1 日 1 日が濃くとても充実していました。まずカナダで一番に感じたことは人がとてもあたたかいということです。例えば、バスひとつ乗るにしても、Hi! や Hello! など運転手とあいさつを交わします。慣れないカナダでの慣れないバス通学や移動に不安を抱いていた私でしたが、すぐに慣れることができたし、むしろ見知らぬ人と気楽にあいさつを交わすことがとても気持ち良いことだと感じるようになりました。また、ホームステイ先では、あまり口数が多くなかった私を快く歓迎してくれ、気を遣うわけでもなく本当の家族のように接してくれたので、本当に居心地がよかったです。

これはホストマザーから教わったことですが、カナダでは言葉にすることの大切さを身に染みて感じました。日本では言葉にしなくてもなんとなく伝え、相手の意思をくみとる文化が

ありますが、カナダでは思うことがあるなら態度ではなく言葉に表さなければ通じません。このことをきっかけに、ホストファミリーとの距離も縮まり大学の授業内でも積極的に発言できるようになりました。クラスメートは中国人が大半を占めていましたが、北海道を知っている人や日本のアニメや漫画が好きで日本についてたくさん質問してくる人もいて、自分は日本のことをぜんぜん知らないんだなと思い、恥ずかしくなりました。ですが同時に、「いただきます」の文化など、「日本ってやっぱりいいな」と思うこともあり、もっと自分の国に誇りを持つべきだとも感じました。

この語学研修では、もっと英語が話せるようになりたいと率直に思ったし、今後は旅行やボランティアなどいろんな方法で海外に行って、世界の文化などを自分自身で感じたいと思いました。



英語による国際交流

1 部 英米文化学科 2 年 會木秀一朗



カナダ、ブロック大学での研修で過ごした三週間は全てが初めての体験であった。この研修でカナダへ行く前まで海外へ渡航した経験がなく、ホームステイ、外人のみの環境、異文化との交流など、私は当初この状況に慣れることができるのかどうかとても不安だった。しかし、実際に研修が始まりクラスに参加していくと、外国人の友人もでき、カナダでの生活にとけこんでいった感覚をよく覚えている。ダウンタウンを一回りすることや、買い物といった簡単な行為がすべて私にとって勉強の機会であった。

私の所属したクラスには、中国人、ブラジル人、韓国人がいた。中国人の英語会話能力に驚かされながらも、積極的にクラスに参加できたことは素晴らしく、日本では行う機会の少ないディベートも、自分の意見を英語で的確に表現し、反論や意見を述べる難しさを感じながら楽しむことができた。中国人や韓国人とも会話をし、お互いの国が持つ各国の人々に対して抱い

ている意識や偏見、その理由などについて意見交換できたことは、私にとってとても有意義であった。英語を用いることにより、言葉が阻んでいたコミュニケーションの壁を乗り越えられることに感動し、国際交流とはこういうことなのだと実感した。

研修中、英語のみの環境に身を置いたことで自分に今なにが足りていないのかを理解することができ、コミュニケーションツールとしての英語は現代に生きる我々に必要不可欠だと再確認できたことは大きな成長の一つである。

このブロック研修で得た経験をさらに生かすため、英語をさらに学び、国際社会で英語を生かした仕事につくために努力しようと考えている。このブロック大学での三週間の経験は一生に残る素晴らしい経験となるだろう。海外に興味のある学生にぜひ行って、これらを体感してきてほしい。



国際文化演習を終えて

1 部 英米文化学科 2 年 木村 安里



私はカナダに行って少しでも英語の能力を向上させたい、日本とは異なる文化を実際に体験したいと思い、この研修に参加しました。しかし、カナダに着いてからは本当にこれから三週間やっていけるのだろうかかと不安な思いでいっぱいでした。そんな私にホストマザーはとても優しく接してくれて、私の片言の英語を辛抱強く聞いてくれました。そのおかげで私はすぐにカナダでの生活に慣れ、充実した 3 週間で過ごすことが出来ました。

ブロック大学の授業では、他の国からの留学生と一緒に英語の授業を受けました。私のクラスには中国とブラジルからの留学生がいましたが、皆積極的に質問や思ったことを発言していて、最初は圧倒されました。しかし、私もこのままでは来た意味がないと思い、自分から発言するようにしました。授業以外でも休み時間にクラスの人と交流し、英語で様々な国の人と話す楽しさを改めて実感しました。

この研修を通して、英語や異文化の他に学ん

だことがあります。私は研修中悔しかったことを書き出して次は絶対に同じことはしないと決めて過ごしていました。お店で注文するときのように言えば英語の発音が悪くてもお店の人に伝わるのか、前の人が注文するのを聞いて真似をしたりしました。そうやって、日本ではあまり考えないことを研修中は 3 週間しかないという思いからやっていました。自分はあるとき何ができなかったからあの状況になったのかという反省と実践を繰り返した三週間だったとともに、自分の中の変化を感じた三週間でした。この経験はこれからの生活で何をするにも大切なことだと思うので生かしていきたいと思っています。

そしてこれから研修に行く人には是非自分からいろんな人と交流してほしいと思います。行っただけでは得られるものは少ないと思います。私も帰る頃になってまだまだ積極性が足りなかったと思いました。せっかくの機会を無駄にせず、有意義なものにしてください。



挑戦のスタート in Canada

2 部 英米文化学科 2 年 榎 彩香



カナダの文化で特に大きな違いを感じたのはやはり食生活です。例えば、カナダの野菜の食べ方についてです。日本では野菜はサラダにしたり温野菜、炒めものにしたりして食べることが一般的ですが、カナダでは違いました。カナダでは、ニンジンを生で食べるところがかなり多くの家で見受けられました。幸い私のホームステイ先では生の野菜は出てこなかったのですが、他のホームステイ先の人は結構苦戦していたようでした。それに加えて、果物を丸ごと一つ昼食として渡されたりすることもありました。他にも日本とは違うのだということを再認識することもありました。たとえば、コメもまた日本とは違い、あちらではほとんどの家がタイ米を使用していました。

さらに食べ方の文化についても日本とは大きく違いました。カナダでは、基本的にお皿を持って食べるということはありません。スープなどは、スプーンを使って、お皿は置いて食べるの

が普通です。直接お茶碗に口をつけて食べるのは行儀が悪いのだそうです。私がそのような行動をしていた時、ホストマザーがそのことを教えてくれました。しかし、私のホストマザーは「これは間違いではなく違いなのよ」と優しく私をフォローしてくださいました。私は今でもこの言葉が印象に残っています。その他にも、カナダは調味料やおかずが手元から遠くにある時は、自分で手を伸ばしたり立って取るのではなく、その近くにいる人に「○○を取ってくださいませんか。」と頼むそうです。私は食卓を通して様々な文化をとっても学んだと感じています。

三週間の研修期間を終えて、今私が感じることは、もっと向上したいという気持ちです。楽しかったことも事実ですが、私はもっと自分は頑張れたと思いました。私の留学はこれで終わりではありません。更なる目標を目指して、いつか新たな国を訪れるつもりです。



卒業生通信



ドラッグストアに勤務して

1 部 英米文化学科 2013 年卒業（柴田ゼミ） 菊地 智美



私は現在、株式会社サンドラッグに勤務しています。サンドラッグは「安心・信頼・便利」をモットーにお客様の多様化するニーズに応えるため、魅力的な店舗作りを力を入れています。具体的には医薬品、健康食品、日用雑貨などを主にお客様に提供しています。私の主な仕事の内容は商品を棚に出すこと、商品の発注をすることなどです。さらに、商品の値段の変更や、新しい商品やおすすめの商品がお客様の目にとまりやすいように配置を変えることなどもしています。日々学ぶことがたくさんあり大変ですが、この仕事にとってもやりがいを感じています。

私には多くの人のために働きたいという想いが大学入学当時からありました。ドラッグストアを就職先として選んだ理由は、年齢や性別、職業などを問わずすべての人から必要とされる医薬品や日用品を取り扱っているからであり、自分が望んでいる仕事に合っていると思ったからです。また、株式会社サンドラッグは主に本州で展開している会社です。北海道はそのフランチャイズ店として展開しており、創業から15年しか経っていません。店舗の運営については本州の会社で培われたノウハウを受け継いでいますが、同業他社に比べたらまだまだお客様からの認知度も低く、広い地域に根付いているとは言えません。そのためよりよい会社を目指す中で、個人としてもやりがいが多く、会社

と共に成長していけるのではないかと考え、株式会社サンドラッグを志望しました。

日々の業務の中ではお客様のニーズについて、また、店舗の運営について多角的に考えています。例えば化粧水一つにしても、効果、メーカー、使用感、価格などだけでなく、お客様の生活スタイルからもお話を聞くことでおすすめ商品を選ぶ時のヒントを得ています。場合によっては化粧水よりも美容液やクリームのほうが合っている方もいらっしゃいますし、薬剤師に肌の状態を相談したほうが安心な時もあります。広い視野で物事を考えるのは難しくもありますが、大学のゼミで行った、1つの問題に対しての原因や現状、将来的な問題や改善策などを各々が考え徹底的に話し合ったことが、お客様のニーズや会社の改善点を考える際に活きていると思います。

これから社会人2年目に入り、入社当時よりも扱う仕事の範囲が格段に広がります。また後輩も入って来るため、より考えて行動しなければなりません。さらに、登録販売者の資格が夏に取得出来る可能性があるので、仕事の合間を縫って勉強に励みたいと考えています。資格を取得した際にはお客様が何に困っていて、どの薬が合っているのかを様々な面から考えられる販売者になりたいと思っています。今後も大学やゼミでの経験を糧に、お客様と会社の役に立てるよう努力していきたいです。



大学院の窓

日々、成長

文学研究科 修士 1 年 竹田 麗華



私が大学院への進学を考え始めたのは、卒業論文に取り組んでいるときでした。研究テーマの考察では主に歴史研究を行っていましたが、私の研究テーマに関係する文献は多く、実際に論文で使用する文献を選ぶのは難しいものでした。また論文を完成させるまでの期間が短く、文献を読む時間は限られていたため、自身のテーマを考察するには物足りなさを感じていました。そこでより深く研究ができる環境を求めて、大学院への進学をはっきりと目指すようになりました。

そして、まもなく大学院へ進学してから 1 年が過ぎようとしています。この 1 年で苦労したのは、大学とはまるで異なる環境にどう対応していくのかということでした。しかし、この苦労したことこそが、大学院の良さ、特徴でもあると思います。

大学院の特徴の一つは、少人数制の講義であるということです。私の場合では、1～2 人の学生対先生という形態だったので、先生との距離をととても近くに感じることができました。講義中分からないことがあればその場で質問す

ることができ、それにより話が発展していくことで講義の内容をより深く理解することが出来ます。そして授業が少人数制であるということは、講義を受ける態度が受け身であってはならないということです。ただ話を聞くのは、大学の講義と何ら変わりません。本を読み先生の話聞き、何を感じたのか、何に疑問を持ったのかななどを、その場でぶつけることができ議論を交わせるのが、大学院の講義であります。時には、“人文学とは何か”といった学問の根本を問うような大きなテーマについても聞くことができ、より深い見識を得ることが出来ます。

大学院入学当初から現在までを振り返ってみると、自身の研究テーマに関連のある本を読みその主旨をいかにまとめるか、そしてどのように伝えるのか、また専門性の高い英語文献を読み読解力を養うなど、自分の至らなかった部分が、成長しているように感じています。

これからの 1 年は、講義で得た見識と多くの文献を使つての修士論文の完成を目指していくことが中心となります。私のテーマは「知識がいかに保存され、後世に伝えられていくのか」という幅広く歴史を辿り、様々な角度から考察していくという、とても壮大なテーマになっています。考察はとても難しいものになったと思いますが、先生方に指導を仰ぎながら、よりよい論文に仕上げていきたいと思っています。大学院に進学し、2 年も長く学ぶ機会を得られたことを忘れずに、一日一日を大事に過ごしていきます。



学会・研究発表

大石 和久

「映像、あるいは人間を超え出る知覚について——ベンヤミン／ベルクソン／連続写真——」、11月16日、北海学園大学人文学会創立記念シンポジウム「人文学の新しい可能性」(パネリスト)、北海学園大学

佐藤 貴史

「J・ハーバーマスの宗教論」、9月10日、第61回日本基督教学会、西南学院大学
「レオ・シュトラウスのフロイト論」、9月14日、第23回政治哲学研究会、北海道大学

手塚 薫

「The Impact of Hunter-Food Producing Society Relations on the Ainu's Subsistence」、6月25日～28日、第10回狩猟採集社会国際会議(CHAGS10)、英国リバプール大学 (University of Liverpool)
「先史文化期からアイヌ文化期における千島列島への移住と適応」、9月18日、日本海洋学会秋季大会、北海道大学
「鳥居龍蔵の千島研究とその後の展開」、10月18日、国際シンポジウム「日本とはなにか——日本民族学の20世紀——鳥居・澁澤・梅棹・佐々木」、法政大学国際日本学研究所

中川かず子

「多文化共生社会に向かう日韓の政策の違い——札幌市と大田広域市の比較——」、7月14日、日韓共同研究シンポジウム、北海学園大学開発研究所

本城 誠二

「周縁からの視線——人文学／文学／文化をめぐって——」11月16日、北海学園大学人文学会創立記念シンポジウム「人文学の新しい可能性」(パネリスト)、北海学園大学

ブシャー ジェレミ

「Communicative engagement with extensive reading」(Bouchard, J., Blankley, T. による共同報告)、8月29日、JALT (全国語学教育学会) Annual Conference、札幌市北星学園大学
「Developing ALT expertise in the EFL classroom」、12月2日、平成25年度外国語指導助手指導力等向上研修会(北海道教育委員会、文部科学省)、ホテルライフオー・札幌

マンビ イアン

「Measuring gains in L2 lexical competence, TEVAL and Vocabulary SIG panel discussion」、10月26日、Conference and venue information: The 39th Annual JALT Conference, Kobe

村中 亮夫

「Effects of the Safety and Security Map Making Workshop on the Environmental Interventions: an Analysis of the Information Contained in the Map」(Muranka, A., Tanibata, G., Yonejima, M., Yuasa, H., Seto, T. and Nakaya, T. による共同報告)、8月7-8日、IGU 2013 Kyoto Regional Conference, Kyoto International Conference Center
「地域に学ぶ人文学」、11月16日、北海学園大学人文学会創立記念シンポジウム「人文学の新しい可能性」(パネリスト)、北海学園大学
「地域の防災・安全活動における安全安心マップ作成のワークショップの可能性——環境介入に着目して——」(村中亮夫・谷端郷・米島万有子・湯浅弘樹・瀬戸寿一・中谷友樹による共同報告)、11月30日、第25回立命館地理学会大会、立命館大学

米坂スザノ

「The Ishinomaki manga project」、6月23日、全国語学教育学会グローバル問題と言語教育研究部会(GILE)北海道大会、札幌市
「Developing an e-portfolio to enhance sustainable vocabulary learning in English」、7月11日、4th WorldCALL Conference、連合王国グラスゴー市(共)
「Global citizenship through disaster education: The Ishinomaki tsunami manga project」、10月13日、韓国国際英語教育教師学会第21回国際大会、大韓民国ソウル市
「Phonetics for Lifelong Pronunciation Development」、10月26日、全国語学教育学会(JALT)第39回年次国際大会、神戸市
「Practical Phonetics for Pronunciation Development」、10月27日、全国語学教育学会(JALT)第39回年次国際大会、神戸市(共)

著書

岩崎まさみ

(共著) 2013 Tasty Tonoto and Not-so-tasty Tonoto: Fostering Traditional Food Culture among Ainu people in Saru River Region. In *Indigenous Peoples' Food Systems and Well-being: Interventions and Policies for Healthy Communities*, Harriet V. Kuhnlein, Bill Erasmus, Dina Spigelski, Barbara Burlingame (eds.), pp.221-233. Food and Agriculture Organization of the United Nations and Centre for Indigenous Peoples' Nutrition and Environment, Rome.

追塩 千尋

『中世説話の宗教世界』(単著)、2013年10

月30日、和泉書院

柴田 崇

『マクルーハンとメディア論：身体論の集合』、9月、勁草書房

マンビ イアン

Fitzpatrick, T. & Munby, I., Knowledge of word associations, In Milton, J. & T. Fitzpatrick (eds.) Dimensions of Vocabulary Knowledge, Palgrave Macmillan, December 2013.

論文

上杉 忍

「いま、アメリカ黒人史は何を語っているか」、12月、『歴史地理教育』第813号、62-66頁
「本田創造著『アメリカ黒人の歴史 新版』は、なぜ書き直されねばならなかったのか——拙著『アメリカ黒人の歴史——奴隷貿易からオバマ大統領まで』に書かなかったこと」、12月、『年報新人文』第10号、38-84頁
「巻頭言、人間の慢心を戒め、深く大地に根差して」、12月、『年報新人文』第10号、2-5頁

追塩 千尋

「日本宗教史の構図——新体系日本史『宗教社会史』に寄せて——」、8月、『人文論集』55号、北海学園大学人文学部、1-18頁
「長谷観音異国霊験譚の意義」、12月、『年報新人文』、第10号、北海学園大学大学院文学研究科、8-36頁

大石 和久

「瞬間と持続——写真とベルクソニスム——」、6月30日、『美学』第64巻、第1号(通号242号)、美学会、35-46頁

柴田 崇

「人工環境と切り結ぶ身体：メディア研究の生態学的転回」、7月、『知の生態学的転回 第2巻 技術：身体を取り囲む人工環境』東京大学出版会、233-257頁
「"extension"をめぐるマクルーハン研究の検証——リチャード・キャヴェルの『空間におけるマクルーハンについて』」、12月、『新人文』第10号、北海学園大学大学院文学研究科、86-119頁

田中 綾

「木下利玄『銀』初版本注釈(上)」(共著)、8月、『人文論集』第55号、北海学園大学人文学部、57-111頁

手塚 薫

「北海道と千島・樺太」、11月、『季刊考古学』

第125号、雄山閣、24-27頁

徳永 良次

「『高山寺地蔵院聖教目録』について」、平成二十四年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集、2013年3月、8-15頁

ニールセン ブライアン

「Students' Perceptions and Learning Outcomes of Online Writing Using Discussion Boards」、『The JALT CALL Journal』第9巻

濱(浜) 忠雄

「『両インド史』における歴史認識の諸問題」、9月、『学園論集』第157号、北海学園大学、1-61頁

本城 誠二

「妄想のアメリカン・ドリーム」、8月、『人文論集』第55号、北海学園大学人文学部、19-37頁

ブシャー ジェレミ

「MEXT Policies on EFL Education: Challenges in linking ideology and policy statement」『JACET 北海道支部紀要』第10号、JACET 北海道支部
「A Stratified View of the Japanese EFL System at the Junior High School Level」、『学園論集』第156号、北海学園大学

マンビ イアン

「i-lex: An improved method of assessing L2 learner ability to see connections between words」、『VERB (Vocabulary Education & Research Bulletin)』第2巻2号、JALT

村中 亮夫

「空間的拡散モデリング」、9月、『人文地理学事典』、人文地理学会編、丸善出版、210-211頁

安酸 敏眞

「アウグスト・ベーク『文献学的諸質問のエンチクロペディーならびに方法論』——翻訳・註解(その6)——」、8月、『人文論集』第55号、北海学園大学人文学部、39-102頁

米坂スザンヌ

「First-year Japanese university students' language learning beliefs: Continuity and change」、11月、『TESL-EJ』第17巻3号、1-20頁(共)

講演

上杉 忍

同志社大学アメリカ研究所秋季公開講演会『『アメリカ黒人の歴史——奴隷貿易からオバマ大統領まで』（中公新書、2013年）を執筆して』（2013年10月28日）
日本アメリカ史学会第28回例会報告「アメリカ黒人史の通史を新書で書くということ」（亜細亜大学 2013年12月14日）

大石 和久

「スクリーンの中の北海道～映画が描いた北の大地～」、10月19日、10月22日（再放送）、道民カレッジ・ほっかいどう学・大学放送講座、HBC／「北海道口ケ映画の特徴」、11月11日、シアターキノ映画講座第2期 vol.2、シアターキノ

「山田航が叫ぶ！ 山田航と叫ぶ！ 短歌入門 第1回学園かえるカフェ」、10月12日、第6回「ホームカミングデー」、コメンテーター

大谷 通順

「中国の父親像」、3月13日、平成24年度第3回札幌市内中国語通訳者懇親会、札幌商工会議所
「故宮博物院裏の一副完整的馬吊牌」、5月14日、北京師範大学研究生学術論壇「治学・修身」系列講座、北京師範大学古籍与伝統文化研究院
「日本図書館漢籍使用」、6月21日、北京師範大学古籍与伝統文化研究院

田中 綾

「綾子さんが作った短歌」、8月22日、三浦綾子記念文学館講座（旭川）
「乙女短歌の近現代」、11月7、14、21日、札幌市生涯学習センター秋期講座
「気軽に楽しむ短歌の世界」、11月16日、置戸町文化連盟文学講座

寺田 吉孝

「キリル文字を知る、ロシアの地名を知る」平成25年10月、北海学園大学市民公開講座「世界の言語と文化のモザイクを眺める」、北海学園大学C30番教室

テレング ト アイトル

「異文化同士の情緒・感情・感性がいかに内面化してきたか——「海」にまつわる感性・情緒の受容と変容——」2013年7月5日、札幌大学孔子学院、札幌市エルプラザ

中川かず子

「在住外国人への日本語教育支援を考える」、10月5日、文化庁委託事業「地域日本語ボランティア養成講座」、千歳市民文化センター

評論・エッセイ

井野 葉子

「後記」、5月10日、『日本文学』第62巻第5号、日本文学協会、86頁
（書評）「吉野瑞恵著『王朝文学の生成 『源氏物語』の発想・『日記文学』の形態』」、10月1日、『国語と国文学』第90巻第10号、東京大学国語国文学会、67-71頁
（書評）「飯塚ひろみ著『源氏物語 歌ことばの時空』」、10月19日、『古代文学研究 第二次』第22号、古代文学研究会、32-36頁

追塩 千尋

（書評）「細川涼一著『日本中世の社会と寺社』」、11月25日、『仏教史学研究』56-1、73-79頁

大石 和久

「スクリーンの中の北海道——映画が描いた北の大地——」、9月、『道民カレッジ・ほっかいどう学・大学放送講座 平成25年度大学放送講座テキスト』、北海道生涯学習協会、21-27頁

上杉 忍

（書評）エーリック・フォナー著・森本奈理訳『業火の試練——エイブラハム・リンカンとアメリカ奴隷制——』（白水社、2013年）『共同通信』2013年8月

田中 綾

（書評）内野光子著『天皇の短歌は何を語るのか』（御茶の水書房）、『図書新聞』11月9日号
（書評）福島泰樹著『もっと電車よ、まじめに走れ』（角川学芸出版）、『うた新聞』11月号
（評論）「菱川善夫論」、『現代詩手帖』9月号、思潮社
（評論）「反・富士山」10月、『やまかわうみ』8号、アーツアンドクラフツ
（解説）「解説」12月、雪森ゆかり歌集『WHITE PAIN』ブイツーソリューション
（年表編集協力）『『戦争と文学』案内』9月、集英社、281-630頁
（選評）「評論」10月、『さっぽろ市民文芸』30号、札幌市民芸術祭実行委員会
（選評）「第28回北海道新聞短歌賞」、『北海道新聞』11月13日
（コラム）「わたしの好きな信綱の一首」12月、『佐佐木信綱研究』第1号、佐佐木信綱研究会
（コラム）「書棚から歌を」『北海道新聞』7月7日◇7月14日◇7月21日◇7月28日◇8月4日◇8月11日◇8月18日◇8月25日◇9月1日◇9月8日◇9月15日◇9月22日◇9月29日◇10月6日◇10月13日◇10月20日◇10月27日◇11月3日◇11月10日◇11月17日◇11月24日◇12月1日◇12月8日◇

12月15日

翻訳

佐藤 貴史

ヒラリー・パトナム『導きとしてのユダヤ哲学——ローゼンツヴァイク、ブーバー、レヴィナス、ウィトゲンシュタイン——』（単訳）、9月、法政大学出版局

寺田 吉孝

「M. M. ドブトロツヴォルスキーのアイヌ語・ロシア語辞典（14）」（共訳）、9月、『学園論集』第157号、北海学園大学学術研究会
「M. M. ドブトロツヴォルスキーのアイヌ語・ロシア語辞典（15）」（共訳）、12月、『学園論集』第158号、北海学園大学学術研究会

テレングト アイトル

「西洋文学批評とその古典の起源」、8月、『人文論集』第55号、北海学園大学人文学部、1-56頁

研究費

大石 和久

平成25年度北海学園学術研究助成（総合研究）
「人文学の新しい可能性」（研究分担者）

佐藤 貴史

青山学院大学総合研究所2013年度研究プロジェクト（代表：西谷幸介）「キリスト教大学の学問体系論の研究」（研究分担者・青山学院大学総合研究所客員研究員）
平成25年度北海学園学術研究助成・一般研究
「20世紀ドイツ・ユダヤ思想史の再検討」（研究代表者）
平成25年度北海学園学術研究助成・総合研究（代表：安酸敏眞）「人文学の新しい可能性」（研究分担者）

柴田 崇

科学研究費補助金（基盤研究C；平成25～27年度）「サイボーグ思想の『原型』——1920年代のイギリス科学思想界の分析——」（研究代表者）

手塚 薫

平成25年度北海学園学術研究助成（総合研究）
「人文学の新しい可能性」（研究分担者）

テレングト アイトル

平成25年度北海学園学術研究助成（総合研究）
「人文学の新しい可能性」（研究分担者）

中川かず子

平成25年度北海学園学術研究助成（総合研究）
「人文学の新しい可能性」（研究分担者）

船岡 誠

平成25年度北海学園学術研究助成（一般研究）
「一休伝をめぐるいくつかの問題」

安酸 敏眞

平成25年度科学研究費補助金基盤研究（C）（一般）（研究代表者安酸敏眞）『《ベルリン精神》の内的相剋としてのシュライアーマッハーとヘーゲルについての研究』
平成25年度科学研究費補助金基盤研究（B）（一般）（研究代表者高橋義文）「ラインホルド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」（研究分担者）
平成25年度北海学園学術研究助成（総合研究）
「人文学の新しい可能性」（研究代表者）

その他

井上 真蔵

（司会）第22回北海道カナダ姉妹都市会議、北海道銀行本店ビル会議室、2012年9月13日

井野 葉子

（司会）第33回研究発表大会 古代後期部門、7月7日、日本文学協会、神戸大学

田中 綾

（対談）三神恵爾展オープニング「廃墟とディオニュソスの芸術」、8月3日、コ・ワーキング・カフェ36（札幌）
第14回三浦綾子作文賞選考会、12月8日、三浦綾子記念文学館（旭川）

テレングト アイトル

英国ケンブリッジ大学で東西詩学と修辞学に関する資料調査（北海学園学術研究助成〈総合研究〉「人文学の新しい可能性」の一環として）
8月6日～9月3日

中川かず子

オランダ（ライデンほか）、英国（ロンドン、オックスフォードほか）資料収集のための旅行（北海学園学術研究助成〈総合研究〉の一環として）、9月5日～9月14日
北海道学生競技ダンス選手権大会・第42回新人戦 大会会長、8月31日、北海道大学第一体育館
第9回林大記念論文選考委員、9月～12月、日本語教育学会

本城 誠二

（司会）シンポジウム「物語はジャンルを横断する」、12月14日、日本アメリカ文学会北海道支部大会、北海学園大学



表紙「女夷」図

彩色、26.7×38cm（間宮林蔵口述・村上貞助編輯筆録『東韃圖記』乾所収 北駕文庫所蔵）

間宮林蔵（安永9〔1790〕―天保15〔1844〕）は江戸後期の蝦夷地探検家、測量家として名高い。北蝦夷地（樺太）探索の幕命を受け、文化5（1808）年から翌年にかけて、東海岸は北知床岬まで、また西海岸は北上して間宮海峡を確認、更に北端近くまで踏査した。『東韃圖記』は、林蔵がこの探査に基づき、地名、地勢、産物、樺太アイヌやオロッコ、スメレンクルの風俗・習慣等について詳述したものに、林蔵の師村上島之丞の養子・松前奉行配下村上貞助（秦貞廉）が挿画を加え編輯したものである。

北駕文庫所蔵の乾坤二巻は貞助自筆本との推定もあり、『北夷分界餘話』と題して、文化8（1811）年に幕府へ献上された貞助自筆本（国立公文書館内閣文庫所蔵）に、文章・挿画共極めて近い貴重書である。本書と同名の写本の存在は知られていないが、安政2（1855）年刊の流布本『北蝦夷圖説』を始めとして多くの伝写本がある。

この図は『東韃圖記』乾巻の後半「南方初島人物」に収められている。当時、樺太（サハリン）の南部に居住していた先住民族の人々について「大抵蝦夷島（北海道）に異なる事なし」としつつも、女夷については「文身（入墨）蝦夷島のごとく濃點する者なくして甚薄し。漸々奥地に至るにしたがって文身せざる者多し」とある。また、垂髪は蝦夷島に比べて長く肩を覆い、容貌艶色の者多しという。

衣服は、地産の木皮布、及び草皮から製する「デタラベ」という2種の布帛、それに交易で齎される木綿衣、その他は魚獣皮を用いて満州服を模製し着したとある。この図については「紅絹藍綿は悉く山旦夷（沿海州の民族）の交易する處の物」「女夷は圖のごとくなる飾服飾帯を着す。皆山旦夷の齎し來る處の物真鍮を以て製し物なり」とあり、水豹のケリ（履物）をつけ手籠を持っている。

（北駕文庫 佐々木光子記）

編集後記

『人文フォーラム』は今号が最終号です。学部創設とともに創刊し、以来、学生、教員、卒業生の交流の広場（forum）として親しまれてまいりましたが、ホームページの設置や時代のニーズの変化にともない、学部創設20周年を機にリニューアルすることになりました。人文学部の学部報は、次号から『ヒューマン』に名前を変えて新しい歴史を刻み始めます。『フォーラム』の歴史を受け継ぐ一人として、これまで制作に携わってくださった皆様に心よりお礼申し上げます。（柴田 崇）

そろんで骨折して札幌市民への道を本格的に歩み始めた私を支えて下さった皆様に感謝申し上げます。（井野 葉子）

人文フォーラム 40：2014年3月5日発行 編集人：柴田 崇、井野 葉子 発行人：郡司 淳
発行：北海学園大学人文学部（札幌市豊平区旭町4丁目1-40 TEL 011-841-1161） 印刷：（株）アイワード